

詩歌・小説の中のはきもの (第26回)

大塚製靴株式会社社友 渡 辺 陸

249 荷物を待ったポーターを連れ、でこぼこの小道を勢いよく降りていく。再びおしゃれな旅行用スーツを着てハイヒールをはいているのが、なんだか奇妙に感じられた。数週間のびのびと過ごしたあとでは、着心地はあまりよくないけれど、文明社会へ帰るためのひとつの段階と考えれば、それもうれしい。

エセル・リナ・ホワイト

★『バルカン超特急 (近藤三峰訳)』から。主人公アイリス・カーがバカンスから戻る場所である。彼女はショートパンツと鉤付きのブーツを履いて一カ月のバカンスを楽しんでいた。ハイヒールを履くことも文明社会に戻る一つのステップなのである。同じホテルでバカンスを過ごしていた牧師も「半ズボン、セーター、鉤付きブーツ」というこれまでにないでたちだったという。文明とハイヒール、ブーツの関係が分かって面白い。ヒッチコックによって映画化されたとき、このシーンはどのように映像化されたのだろうか。

250 山道を歩くときは、農協で見つけた作業シューズ (先が割れていない地下足袋) にはき替えることにしています。家の中では素足。スリッパが嫌いで置いてないので、「わっ、このうち、野蛮や」と、心の中で叫ぶ人もいるかも分かりません。でも、土足で家に入る習慣がない日本では、あまり必要がないと思う。

イーデス・ハンソン

★『南西斜面からのたより』から。世界遺産に登録される直前の熊野古道を歩き、高

原王子から小雨にけふるハンソン宅を見上げてきた。彼女はこの地に移住後、白い運動靴を買い、雨の日のために長靴も購入したが、地元中辺地の人は、どしゃぶりでも長靴ははかないのが意外だったようだ。熊野の山道はぬかるまないし、縦横に舗装された車道が発達しているから、地元の人が別に恰好をつけて履かないでいるわけではない。

251 人並みはずれて丈が高い上にわたしはいつも日和下駄をはき蝙蝠傘を持って歩く。いかに好く晴れた日でも日和下駄に蝙蝠傘でなければ安心がならぬ、此は年中湿気が多い東京の天気のに全然信用を置かぬからである。変り易いは男心に秋の空、それにお上の御政事とばかり極ったものではない。 永井荷風

★『日和下駄』の冒頭。都会に棲むご隠居、陰士然として荷風は、反骨とこだわりをもって暮らしていた。市中の散歩が子供のころから好きだったという。主に晴れた日に履く歯の低い日和下駄を履いて江戸の切り図を手にとり東京と江戸を往きつ戻りつし、勝景の破壊されるのを嘆く。「日和下駄の効能といわば何ぞ夫不意の雨のみに限らんや。天気つづきの冬の日と雖山の手一面赤土を捏返す霜解けも何のその。アスファルト敷きつめた銀座日本橋の大通、矢鱈に溝の水を撒きちらす泥濘とて一向驚くには及ぶまい」と意気軒昂だった。

252 よるべない人

口先三寸で生きてきたが、もはやお手上げ。靴はダンスではきつづした。はだしで歩くのはせつないねえ。 ゲーテ

★『ファウスト（池内 紀訳）』ワルブルギスの夜の夢-幕間劇-から。ヨーロッパでは気候的にいっても裸足では暮らせない。だから靴も買えなくなったとき、万事休すの状態になる。日本では一年の大半を裸足でも暮らすことはできるが、社会的には裸足で都会生活はできない。上着はまあまあ見れるものを着ているのに、底に穴があき、甲革の破れた靴を履いた人を見かけると、「どうしたんですか？」と尋ねたくなる。破綻は末端に行くほど目立つものである。

253 夜はこれからだ。気を取り直して腹を決め、靴を履いて出かけるんだ。…さあ、行動開始だ。靴を履け。…まず靴だな。さあ出かけるぞ。ベッドの縁に座って両足をスリッポン・シューズに押し込む。ダーモット・ボルジャー

★『フィンバーズ・ホテル（茂木健訳）』から。七ページの間に三度、主人公は靴を履くという行為で自分のエンジンを始動しようとする。すべては靴を履くことから始まるのである。普段、私たちは何気なく靴を履いているが、靴を履くのは必ず次の能動的行為に直結しているということを意識したらいい。安手のハウツーみたいな物言いになるが、選挙の出陣式に候補者が白鉢巻をするように、毎日出勤時に靴を履くとき、「さあ、行動開始だ」と声に出せば、人生は確実に変わる。

254 黒い大きな男靴だ。まだ型は崩れていないが、海の中でも歩いてきたように白い塩をふいていた。もう何日も油を吸ったことがないとみえる皮は乾ききっていたが、もとは素姓のいい靴だといわんばかりに、その型は古典的に端正だった。紐もしっかりとつき、両方ともきちんと結ばれていた。それを穿いていた男の肌のぬくもりは感じられなかったが、男の足の形はくっきりと想像できた。
瀬戸内晴美

★『抱擁』から。深夜、エレベーターに独りで乗ったところ、爪先をこちらに向けた靴が目に入った。一瞬寒気が走った。ゆっ

くり上がって行くうちに、靴が泣いているように見え、初老の男のくたびれきった顔、節の高い指、その男の歪んだ醜い顔を想像し、「まるで怪奇漫画の凶柄だ」と、主人公は思った。

255 伊佐はその頃から、皮靴が自分の足をいためていて、一步一步が苦痛であることがわかってきていた。彼はその苦痛のために、この靴をはいてきたことを悔やみだし、それはこの見学のためであり、ひいては外国語を外人のごとく話させられることのためであり、自分がこんな職業についているためだと腹が立った。苦痛はだんだん増してきた。彼はミチ子よりおくれまいとしたが、どうそれさえも出来なくなってきた。彼はミチ子がハイ・ヒールを包みこみ、かわりに運動靴にはきかえて平気で歩いているのがねたましい気持ちにさえなった。自分の周囲はもちろんのこと、百米さきを見通しても誰一人自分のはいている靴で難渋しているものはいなかった。靴がこんなに彼の気になりはじめたのは生まれてはじめてだった。彼は実はその靴を同僚から借りてきていたのだ。
小島信夫

★『アメリカン・スクール』から。昭和二十三年、アメリカン・スクール見学団の先生たちにくつつかの注意事項が伝達され、その中に「服装の清潔」という項目があったので、同僚の靴を借りて行ったのだ。まだ耐乏生活が続いている時である。結婚式に招待されると靴を借りて出席することが珍しくなかった。このあと伊佐は、仲間にも勧められてハダシになった。ハダシが一番快適だったが伊佐はそのことを恥じた。アメリカン・スクールのウィリアム校長は、“タケノコ生活”に耐えていた貧乏教師たちに対して、今後ハイ・ヒールを履いてこない日本人の参観を認めないと宣言した。戦後の混乱期の喜劇的エピソードである。

256 じつは、さきにコレクションの中の二セモノを整理したとき、その中でも最低の二セモノを並べた室の床に、そのほりだらけの隅に、雑巾よりもひどいボ

口キレがぼいと捨ててあった。秋作がそれをまた箒で掃き捨てようとする、ボ口がひろがって、たちまち燦然と光をはなつものころがり出た。たしかに九カラットぐらいのブルウホワイトのダイヤモンドがそこにみつめられた。秋作は当座しばらくそいつを元のままにほっておいたが、やがて亡祖父のボ口靴を手ずから修繕して、底の革をがっちり厚ぼたく張って、左のかかとの部分に細工したところに、このえらそうにぴかぴか光るやつをぶちこんで、そいつに二度と目の目を見せないために、またそいつの記憶を永遠に踏み殺すために、ほとんど祈りをこめて封じた。いま、貴重なものは罪の現物ではなくて罪の観念であった。秋作はボ口靴のかかとを踏みしめて、すれちがう肩にぶつかるまで、ひとごみの中を押し通った。 石川 淳

★『荒魂』から。なるほどこういう靴の履き方もある。嫌いな上司の写真を入れたり、今なら年金官僚と書いた紙を入れるということも考えられるし、そんな神社の木に呪いの釘を打つみたいなのはどうもという向きには、恋人の髪や愛妻の爪などを入れるということもあっていい。世のしきたりに従ってただ足を突っ込んでいくのではなく、一步一步をこれが自分の人生なのだ意識して歩くことができる靴が、自分の持つラインアップの中に一足あるのは素晴らしいことではないだろうか。

257 市ヶ谷駅と靖国神社のあいだの電車通りは、今も三十年前も屋なみが低くて、これというほどの灯火のかがやく商店もない。

かぞえ年十八歳の私は、毎晩駿河台の英語学校から羽織袴に下駄ばきで、ぼくぼく暗い靖国神社よこを歩いてかえってくる。 平林たい子

★『砂漠の花』から。大正十二年のことである。私は平林さんが靴を履いたのを見たことがない。父の友人だったので、何度か私の家にお出でになった。が、いつも和服に草履であった。私が靴会社に勤めている

と知ると、「それでは、一度お世話になりましょうかねえ」と言ってお下されたが、それはついに実現しなかった。

258 小学校五年生の終りごろ、娘の脱ぎ捨てた靴が玄関に散らばっていた。直そうとして何気なくその靴に足を入れた時である。靴は私より一回り大きかった。ずーん、と衝撃が走り、涙が溢れた。「この子、もう育ち終ったんだ。もう干渉することはできないのね」—その時の感触は今もありありと記憶している。

尾崎左永子

★子供が学校で書いた作文を読んだり、一緒に登山したりしたとき、子の意外な成長を知って驚いた経験は誰にもあるだろう。著者は子の靴に足を入れ、その確かな成長を身をもって体感し衝撃を受けたのである。私が全集や大型の辞書を断りもなく父親のツケで本屋から買い求めたとき、それを知った父に叱られたが、今考えてみるとあの表情は半分嬉しそうであったな、とこの文章を読んで懐かしく思い出した。私はそれらの本を古本屋に売り払って小遣いにしてきたのまでは父は気づかなかった。大学生のとき、父と私の靴は共用だった。私は“育ち終わって”いたのである。

259 発掘を担当した古泉弘さんによると、発掘ではっきりと確認できた面の一つが、明暦三年（一六五七）の大火によってできた焼土の堆積だという。この面より上にあるか下にあるかで、出てくる物の年代が推定できるわけである。ここでは、差し歯の「下駄・足駄」は、焼土の下で数が多く、「駒下駄」は焼土の上で極端に多くなっているという。 寺島孝一

★『アスファルトの下の江戸』から。この発掘だけで断定はできないが、種々の記録から貞享年間（一六八四～八七）から駒下駄が増加したらしいという。駒下駄というのは差し歯などせず一枚の板で造ってあるものだが、江戸の後半から主要な地位を占めたことが考古学者によって実証的に明らかにされたのである。